

かごしまの 昔話

「喜界の隠れ里」



昔、喜界島の志戸桶に貧乏な男がおりました。男は、一頭の牛を飼っていて、海岸に連れて行き運動させるのが日課でした。

ある日、いつものようにそこへ行ったとき、急に眠くなったので、牛を大岩につなぎ自分は寝入ってしまった。

しばらくして、「モー」という鳴き声で目をさまし、驚きました。牛が大岩にある穴に引き込まれそうなのです。牛にはおびただしい数のア리가群がっていて、そのアリたちに導かれるように、小さな穴に向かっています。男はあわてて手綱をとり、引き戻そうとしました。しかし、逆に強い力で自分も牛と共に穴の中に引き込まれ、気が失ってしまいました。



気がついてみると、畑の隅に座っており、牛はのどかに草を食べていました。岩穴の中に引き込まれたはずが、あたり一面広々とした畑です。今まで見たこともない世界で、男は恐ろしくなりました。

そこへ、見知らぬ人がやってきて、「あなたのおかけでこの畑を耕すことができました。実にありがたい。お礼をします」と言います。しかし、村の男は「いやいや、お礼なんぞどうでもいい。どうか命だけは助けてください。牛はあげますから」と答えました。すると、その人はたくさんのお金をくれて、「心配はいりません。すぐ村に戻れますよ。お金がなくなったら、いつでもここに来ればあげますからね。でも今日のこととは、決して人に語ってはいけません。さ

あ、目をつぶって」と言いました。男がその通りにすると、自分の家に帰っていました。

それから、男は村一番のお金持ちになりました。ある日、友達と酒を飲んでいて、不思議な穴の話をしてしまいました。友達は「そこへ連れて行ってくれよ。金がほしいのではない。この目で見たんだよ」と言うので、二人で出掛けました。しかし、穴はしっかりふさがっていて、少しのすきまもありませんでした。この後、男は急にお金に不自由するようになり、あつという間にもとの貧乏になってしまったということです。

原話『喜界島昔話集』
文／有馬英子 絵／二石綱夫